

Cattleya maxima

「カトレア・マキシマ」

カトレア・マキシマを取り上げるのは、実はこれで2回目となります。自生地シリーズ第1回目の2002年に、セルレア‘ヘクター’のメリクロン苗発売を記念し特集しました。このときの内容は、今回当園のホームページに掲載してありますので古いリストをお持ちでない方はぜひご覧ください。

カトレア・マキシマは、最近でこそ人気の高い原種としてみなさんによく知られるようになりましたが、実は15年以上前までは“ほとんど誰も知らない”“あまり売っていない”カトレア原種だったのです。マキシマが初めてある程度まとまった数量で輸入されたのは1987年に向ヶ丘遊園で開催された【第12回世界蘭会議】の時であったと思われます。この時にエクアドルの蘭園がマキシマを大量に販売し、そのなかに変な個体があったのがきっかけで、脚光を浴びるようになりました。当園の名前が付いたマキシマ‘須和田’も



コースタルタイプのマキシマ ‘Via del Pacifico’

このときの株の一つで、その後1994年にアメリカ蘭協会からAMという賞を頂いています。この同じ年に‘須和田’と‘フクエ’を使ったカトレア・マキシマのシブクロスを行い、その中から2005年に7個体もの入賞花が生まれました。このうちの一つが今年の新発売メリクロン、マキシマ‘ゴージャス’SM/JOGAになります。

マキシマの人気の秘密は何でしょうか？カトレアの理想の花型からはかなり外れたやや暴れ気味の花が多く、1輪では残念ながら高い評価を得られませんが、マキシマは他の単葉系カトレアにはない、1花茎に沢山の花を咲かせるという特徴があります。このボリュームたっぷりに咲いた姿を一度でも見るとすっかり虜になってしまう方が多いからでしょう。また他のカトレアに比べ栽培が容易で、早く大きくなってくれるのも魅力の一つです。

さて自生地の様子はどうなっているのでしょうか？人の手を借りずに何百年とその地で繁殖を繰り返しているわけですから、私達への栽培のヒントが隠されているはず。マキシマは主にエクアドル南部とペルー北部に自生しています。自生地は大きく2地域に分かれ、海岸に近いタイプを「コースタルタイプ」または「ローランドタイプ」と呼びます。このタイプは草丈が高くなり10～20輪位の大きなボール状に開花するのが特徴です。色彩はややうすいピンク色系です。世界的に有名になったセルレア‘ヘクター’もこのタイプです。



エクアドル南部のマキシマ自生地 乾期の終わり11月の様子



非常に高い樹の上で葉を大きく広げながら育つマキシマ



古い大木に着生して開花している多数のマキシマ



輪数の多いコースタルタイプ



細い枝をぐるっと覆い尽くし育つマキシマの巨大株

もう一つの地域は、標高1300m辺りの山に自生するタイプで「マウンテンタイプ」や「アップランドタイプ」と呼ばれます。このタイプは草丈がやや低めで、花の輪数もそれほど多くはつきませんが、濃色の花が多くあります。

栽培は比較的容易とされるマキシマですが、念のため現地の気候を確認してみましょう。自生地の主な開花期は、乾期の終わりの11月～12月です。12月～4月が雨期、5月～10月が乾期、10月、11月は少し雨が降るとのことです。赤道直下の国での事ですから、日本でこの月がそのまま当てはまる訳ではありませんが、現地の雨期が生育期間で、これが5ヶ月あります。その後約6ヶ月間の生育休止期を経て開花するわけです。日本ではこのサイクルが少し狂っていると思いますが、4月から生育期に入り9月頃まで育ちます。その後少しの休止期を経た後、10月下旬から2月頃までに開花してきます。これはおそらく完全に乾期を人為的に作っていないため、わずかな休止期を経て開花してきていると思われます。自生地では雨期が生育期にあたります。栽培を行う時はこの点をしっかりと覚えておく必要があります。新芽の伸び出しからバルブの完成までの期間は、水切れのないように、十分な水やりを行いながら栽培管理します。

当園の実生苗では「コースタルタイプ」である‘フクエ’と「マウンテンタイプ」である‘須和田’を交配した苗から素晴らしい花が続々と開花しています。また昔は貴重品だったアルバやセミアルバの苗も充実してきています。ボリューム満点で見応えのあるカトレア・マキシマ、ぜひ栽培して咲かせてみませんか？

(江尻宗一)



風が吹き抜ける谷へつきだした枝に着生するマキシマ